

光源氏の心と恋の執着

— 葵卷から賢木卷

高田 祐彦

はじめに

『源氏物語』葵卷は、いわゆる車争いの事件から六条御息所が生霊となり、光源氏の正妻葵の上が命を落とすという重い内容を語っている。生霊となることを自覚する御息所の心理過程や、その生霊の姿を目の当たりにしたことで、女の愛執の恐ろしさを身にしみて味わった源氏の心情などが主な読みどころとなるが、一方で、源氏と紫の上が新枕を交わすという展開に照らしてみれば、源氏の正妻ともっとも存在感のある愛人を二人ながら物語世界から消すことにもなっている。

この葵卷を受ける賢木卷は、娘の斎宮に付き従って伊勢に下向する六条御息所と源氏との野宮の別れの場面に始まり、続いて、桐壺院死去、藤壺出家、源氏と朧月夜の密会発覚という具合に、立て続けに源氏を追い詰めてゆく出来

事の連鎖によって、須磨下りへの道筋がつけられる巻である。

このように、この二巻を一連の流れとして出来事に即して捉えてみれば、朱雀朝における光源氏の衰勢を語るものと見ることが出来る。二巻に展開される出来事は、源氏を須磨下りに追いつめてゆくにふさわしくダイナミックであり、そうした動的な展開が物語の推進力になっていることは疑いない。しかし、一方、この二巻には、六条御息所、光源氏、藤壺など主要人物の内面がその動的な展開と不可分に深く描かれているということも、見逃せない重要な側面である。たとえば、光源氏の内面に即して見てみると、葵巻では、六条御息所の生霊出現によって、光源氏はこの世を「憂し」と思い、出離の思いすら萌し、恋に懲りている姿を見せていたにもかかわらず、賢木巻に入ると、困難な相手への思いが繰り返し語られ、藤壺の寝所への侵入、ひいては臘月夜との密会発覚にまで至る、というように、むしろ対照的なありかたであるともいえる。したがって、葵巻から賢木巻へのつながりは、出来事を中心として連続的に捉えることだけでは収まらない、複雑な内実を持ったものとして考えてみなければならぬだろう。

そこで、次のような視点を導入してみたい。

光源氏との恋に絶望し、都に居場所を失った御息所は伊勢に下るわけであるが、源氏も政治情勢の圧迫に加えて、女性たちとの困難な関係によって都を離れざるを得なくなる。この御息所と源氏のいずれもが都を去るという展開を一種の相似形と捉えて、そこからこの二巻を支える物語の仕組みを考えてみる。具体的には、まず、葵巻から賢木巻にかけて、六条御息所の心情と光源氏の心情とを関連づけて捉える。とくに、恋の執着という側面においてこの両者の心情に脈絡が通うことを強調したい。そこから、作中人物の心情の動きこそが、そうした大きな物語の展開を導き出している、というところまでたどり着くようにしてみたい。

一 六条御息所の恋の執着

車争いの事件により、深く心が傷つけられた六条御息所は、懐妊中の葵の上に自分の生霊や亡き父大臣の霊が取り憑いているという噂に接して、次のように思い当たるところがあつた。

大殿には、御物の怪いたう起こりていみじうわづらひたまふ。この御生霊、故父大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。

(葵②三五―三五六)
(注上)

左大臣家では、葵の上に取り憑いていたもののけを、六条御息所や「二条の君」(紫の上)などの仕業ではないかと疑っていたが、世間では、六条御息所とその父大臣の霊の出現として、左大臣家に対する攻撃と受け止められ、そのようないわば社会的な広がりを持った霊の仕業という形で、御息所の耳に入ってくるのであつた。御息所自身には、「人をあしかれなど思ふ心」があるという自覚はなく、「もの思ひ」によって魂が遊離していると感じているが、それは、単に意識の表面と深層心理との乖離というようなことではないのであつた。物の怪に取り憑かれた葵の上には桐壺院からの見舞いもあり、「世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまざま思しよらざりけり」(三三三)とあるように、もともと多少は存在していた「いどみ心」が車争いによって発動したものののであつた。こうして御息所自身に意識された魂の遊離は続けて次のように語られる。

年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなきことをりに、人の思ひ消ち、無

きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいとまよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛いかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度重なりにけり。(三六)

夢の中で葵の上を打擲している自分の姿を認めることが度重なっている、という。ここには、「猛く」「いかき」「ひたぶる心」「うちかなぐる」といった強烈な印象を持つ、しかもあまり例を見ない語が連ねられ、その異常な体験が鮮明にかたどられている。「はかなきことのをり」は、先の「はかなかりし所の車争ひ」という叙述を承け、「一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや」とあるように、みずからの心の動きは制御しがたいものと意識されていたともいう。そうした自分自身の意識をも顧みたうえで、文章は生霊発動の噂への納得として、次のように進んでゆく。

あな心憂や、げに身を棄ててや往にけむと、うつし心ならずおほえたまふをりをりもあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよ言ひなしたつべきたよりなりと思すに、いと名立たしう、ひたすら世に亡くなりて後に恨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、現のわが身ながらさる疎ましきことを言ひつけらるる、宿世のうきこと、すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ、と思し返せど、「思ふものを」なり。(三六―三七)

ここでは、まず「心憂し」によって自らの生霊発動の事態に対する思いが語られ、死後に恨みを残すことでさえ嫌悪されるのに、生きているうちから生霊出現などということ自分を起こしてしまうのは、「宿世のうきこと」としか思われない、という。こうして先の「身ひとつのうき嘆き」に回帰しつつ、そのような「憂き宿世」を少しでも軽減しようと、源氏への思いを断念しようと努めるのであった。この後、斎宮の野宮入りが近づく状況の中、御息所は

「ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふ」(三七)という状態になり、直後に葵の上に取り憑いて姿を現すことになる。

こうして「憂し」の自覚を繰り返した果てに生霊としての姿を現すのであるが、すでに、ここまでの御息所にも、やはり「憂し」の思いが繰り返されて^(注2)いた。

(1) ものも見で帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるるも心弱しや、笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。(中略)

影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる

(二三～二四)

(2) 大将殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。(三二)

(1) は、車争い直後、源氏の行列を眺める御息所の歌。(2) は、葵祭が終わった後の御息所の思いである。(1)では、「身のうきほど」が「いとど知らるる」とあるが、物語の叙述としては、御息所が「憂し」を自覚している最初の箇所である。葵巻巻頭で、娘の斎宮とともに伊勢に下ろうかと逡巡していることなどから、身の憂さをずっと抱えていたことが知られる。また、(2)にも「いとど」とあって、やはり車争いでそれまでの「憂し」という思いがいよいよ深まったことがわかる。これらで注目されるのは、いずれの「憂し」の場合も、水の表現が関わっていることである。(1)には、「みたらし川」、(2)には「御禊河」があり、ともに斎院の御禊を示す表現である。そこか

ら、水に浮き漂う不安定な身の上の連想が導かれるが、これらの「憂し」それじたいは、必ずしも「浮く」などとの掛詞ではない。しかし、たとえば、(2)の直前には、「釣する海人のうけなれや、と起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましようしたまふ」(三二)とあり、「伊勢の海に釣りする海人のうけなれや心一つを定めかねつる」(古今集・恋一・よみ人知らず)を引歌としながら、「うけ」(浮子のこと)さながらの落ち着かない「心地」が意識されている。しかも、(2)の「定めかねたまへる御心」は、この引歌を分散的に用いた表現であって、そこからは「いとどよろづいとく」には「浮く」のイメージが揺曳する。

こうした水と関わるイメージは、さらに次に御息所が「憂し」を用いる箇所にもつながってくる。

「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき

山の井の水もことわりに」とぞある。

(三四～三五)

水と関わるイメージを集約したようなこの歌が源氏に届けられ、「憂し」と「浮く」の連動した御息所の状況から、前述の生霊の噂を納得する御息所の心情へと至り着くのである。斎院の御禊に端を発する御息所の懊悩は、水に漂う不安定なイメージの中から、「浮きたる」心のありようとしての遊離魂へと引き絞られてくる。

二 光源氏の「憂し」

生霊事件まで御息所の内面は、「憂し」を軸にたどられていたが、生霊事件からは今度は光源氏の「憂し」に焦点

が
あてられる。

次は、懐妊中の葵の上に六条御息所の生霊が取り憑き、出現する場面である。

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさら
に思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれど、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るもかたはらいいたう思さる。

(三九～四〇)

生霊は、調伏される苦しさと遊離した魂を元に戻すことを願うが、「憂し」という訴えをすることはない。この生霊出現によって、「憂し」という思いを抱くのは、源氏である。この生霊の言葉と姿を「心憂し」と感じたことは、この後も「大将殿は、心地すこしのどめたまひて、あさましかりしほどの間は語りを心憂く思し出でられつつ」(四二)とか「かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引き返しつづつとこのたまひしことども思し出づるに心憂ければ」(四四)などと繰り返される。

こうした源氏の気持ちには、葵の上の急逝を経て、次のような思いへと凝らされてゆく。

(a) 大将殿は、悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば、ただならぬ御あたりのとぶらひどもも心憂しとのみぞなべて思さるる。

(四六～四七)

「思ししき」とあるところに、光源氏の受けた衝撃の大きさがうかがわれる。また、ここでは、「うき」と「心憂し」との微妙な違いにも注意しておきたい。「心憂し」がどちらかといえ、何らかの出来事に対する反応としての感情であるのに対して、「うき」の方はよりじつくりと心内に反芻されて出てくる感情である。

これに続いて、次の箇所が問題となる。

(b) かの御息所は、齋宮は左衛門の府に入りたまひにければ、いとどいつくしき御浄まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かかる絆だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなましと思すには、まづ対の姫君のさうさうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。
(五〇)

この「うしと思ひしみにし世」については、葵巻冒頭の「世の中変りて後、よろづもの憂く思され」を承けるとする説も古注釈以来あるが、やはり(a)の「世の中をいとうきものに思ししきぬれば」を承けるものと見るのが妥当であろう。(a)の「世の中」が男女の仲に重心があるのに対して、こちらは世の中一般に広がりを持つが、「思ひしき」と「思ししき」との表現の一致から見ても間違いのないところであろう。

さらに、この「うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて」という一節には、厭世観への広がりもたらされていることが新たな展開であるが、その厭世観はただちに、生まれたばかりの夕霧や紫の上への思いによってブレーキがかけられることになる。

こうした源氏の「憂し」の思いに、前節で見た御息所の「憂し」の思いが番えられるように語られるのが、次の、御息所からの弔問の便りとそれに対する源氏の返事を描く場面である。御息所からは次のような歌が届く。

「聞こえぬほどは思し知るらむや。」

人の世をあはれと聞くと露けきにおくる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。さりとして、かき絶え音なうきこえざらむいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思し乱る。

(五一〜五二)

生霊となつて現れていながら、白々しいお見舞いだと源氏は「心憂し」と感じる。この御息所の歌に対して源氏は「とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき」(五二)という歌を返し、これを見た御息所は、

ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいとみじ。なほいと限りなき身のうさなりけり、

(五二)

と、あらためてわが身の「うさ」を思い知る。そして、かつて前坊死去後に桐壺帝からの宮中の残るようにとの要請を拒否したことを思い出し、

かく心より外に、若々しきもの思ひをして、つひにうき名をさへ流しはてつべきこと、と思し乱るるに、なほ例のさまにもおはず。

(五三)

と、「うき名」への顧慮に至るのである。もはや、御息所には都に生きる場はなくなつたといえよう。

このようにして、車争いによって「憂し」の思いを深く抱え込むことになつた御息所が生霊として源氏の前に現れ、その生霊との対面によって、今度は源氏が身にしみて「憂し」の思いを抱くようになった。そして御息所の弔問によって、両者の「憂し」が併せて表現されることによって、葵卷の六条御息所と源氏の物語は一つの区切りを迎えるのである。

三 光源氏の恋の自省

前掲の（a）と（b）をあらためて俎上にのせるところから始めよう。

この二つの箇所から、二つの問題をとりあげたい。一つは、これまで源氏が抱いてきたのは「心憂し」であつたが、この二箇所には「憂し」が現れてきている、ということである。もう一つは、いずれも「憂し」という思いから「なべて」という語によつて、源氏の思いに広がりをもたらされている、ということである。

まず「憂し」の問題であるが、（a）は葬の上逝去後まもなくの叙述であり、葬の上の死がもたらす悲しみが源氏に深い「憂し」の思いを与え、それを（b）は受け継いでいる。巻冒頭の「世の中変りて後、よろづものうく思され」という底流の上に、正妻の死と愛人の生霊という衝撃が「憂し」という深まった思いを導いている。

次に、「憂し」から「なべて」への展開であるが、もちろん、（a）は愛人たちからの見舞いに対して、一様に「心憂し」という心情がこみ上げるのであり、（b）は、「うし」からさらに進んで厭世の思いを抱くところまで行くので、具体的な内容は異なっている。しかし、源氏が深く抱いた「憂し」の思いを同じ「なべて」の語によって広げるという行文はよく似ているのであり、たとえば、ここには、

おほかたのわが身一つの憂きからなべての世をもうらみつるかな

（拾遺集・恋五・紀貫之）

という歌の発想の枠組みに近いものを見てとることができるであろう。

こうして、男女関係やこの世との距離をとろうという思いが源氏の中に強く萌してくる。それは、一途に出家への思いへと進むわけではないものの、紫の上との新枕後に朧月夜の宮仕えの噂を聞いて、次のような思いを抱くところ

へつながつてゆく。

口惜しとは思せど、ただ今は異ざまに分くる御心もなくて、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の恨みも負ふまじかりけり、といとどあやふく思し懲りにたり。
(葵②七六)

この源氏の感慨は、巻冒頭で桐壺院が源氏と六条御息所との噂にふれて、「…心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」(二八)とか「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」(二八)などと訓戒していたことと、首尾呼応する。桐壺帝の時代には、光源氏の恋は基本的に忍びの恋として語られ、女性同士の関係というものはほとんど生じなかつた。^(注6)それが、朱雀帝の時代になつて、源氏と六条御息所との噂は世間に広まり、桐壺帝は自らの経験に照らして、源氏の恋を懸念していた。しかし、桐壺院の訓戒も空しく、源氏は葵の上を死なせ、六条御息所には自分との仲を絶望と思わせることになつてしまつた。こうした源氏の恋の自省とでもいふべき思ひは、しかし、ここが初めてではない。同じように、女の死という悲痛な経験をした夕顔との場合にも、源氏は次のような思ひを抱いていた。

かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになすべきなめり、ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。
(夕顔①二六九～一七〇)

ここでは、「おほけなくあるまじき心」が、いまだ明らかにはされていない藤壺への思ひを指すことになるが、その「報い」として夕顔の死がもたらされ、それは忍びの恋でありながら、いつかは世間に漏れて自分の不名誉になるだろう、という不安が抱え込まれている。物語世界には、この源氏の秘密は世間に漏れることはなく、代わりに忍びの通い所であつた六条御息所との仲が噂となり、悲劇を招いたのであつた。

桐壺院の訓戒に照らしてみれば、正妻の葵の上を失ってから紫の上との新枕が語られる運びは、桐壺更衣を失った桐壺帝がやがて藤壺を迎えた運びの変形といってもよいだろう。葵卷の物語は、新しい伴侶紫の上を得た源氏が、自らの悲痛な体験に懲りて一途に紫の上一人を愛するかのような閉じ方を迎え、その源氏の真情に偽りはなさそうであるが、物語の語り方という点からみれば、それは源氏と紫の上との新しい出発を語る一つの巻の閉じ方に過ぎず、賢木卷では、再び源氏と複数の女君との関係が、源氏の運命を決する展開となつてゆくのである。

四 賢木卷の恋の情動

賢木卷を、光源氏と女君との関係に焦点をあてて捉えてみると、冒頭に六条御息所との別れが語られた後は、源氏にとつて関わるべきではない女君との関わりが語られる巻だといつてよい。よく知られるように、この巻の源氏の女君への思いは「癖」という語で特徴づけられる。^(注1)齋宮、朧月夜、朝顔の齋院の三人である。^(注2)齋宮と齋院は言うまでもなく、恋の対象となりえない女性である。朧月夜は、女官として御匣殿から尚侍へと昇進し、帝のもつとも近くにいる。建前としては女官であっても、尚侍は帝の夫人同然である。齋宮には下向の折に手紙を送つた程度であるが、朝顔には雲林院から手紙を送り、その後も手紙のやりとりを続けている。朧月夜とは密会を繰り返している。

こうした源氏の行動は、先に見た葵卷巻末のいささか殊勝な思いとは大きく食い違つていようである。朱雀帝への代替わり後に始まつた世の中の変化は、桐壺院の死によつて、いよいよ源氏方への圧迫として現れてきていた。そうした情勢のなか、身を慎もうとしない源氏の行動は一見不可解ではあるが、そこにこそ、源氏という人物の底知れぬ存在感がある。本稿冒頭に記したように、こうした女君との関わりが、やがて源氏から都の居場所を奪うことに

なるが、そうした恋の情動によって、わが身のおきどころをなくす点において、賢木巻の源氏の物語は、ある意味では、葵巻の六条御息所の物語を襲っているといえるだろう。むろん、その恋が直接には帝への反逆を疑われるという一面は、六条御息所の場合とはまったく異なるとしても、それは光源氏と六条御息所との置かれた立場の違いに由来することであるから、相違があることはむしろ当然である。そうした相違をふまえつつ、自分自身にもどうすることもできない恋の情念が、わが身を滅ぼすという点で、二つの物語は貫かれているのである。

このような見方が、葵・賢木両巻の読み方として妥当性を持つかどうか、さらに検討してみよう。

賢木巻で要となるのは、源氏と藤壺との関わりである。桐壺院の死後、いよいよ東宮の地位を保持するために慎重にふるまうべきにもかかわらず、源氏の藤壺への執着は収まるどころがない。源氏の藤壺への思いは、恋ということでは足りない、特別な、あえていえば常軌を逸した情動である。源氏は東宮の後見という立場を自覚しながらも、藤壺への思いを抑制することができない。これは源氏という作中人物の根幹をなす性質なのであろう。前述の女君との関わりに用いられていた「癖」の語が、藤壺には用いられないということも、藤壺が別格の存在であることを証し立てていよう。桐壺院の死後、藤壺に迫る様子を見てみよう。

御祈禱いのりをさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、思しいたらぬことなくのがれたまふを、いかなるをりにかありけん、あさましうて近づき参りたまへり。心深くたばかりたまひけんことを知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。
(賢木②一〇七)

自分はともかく、東宮の地位安泰を願う藤壺は、源氏の執着を恐れるあまりに、祈禱まで行わせていた。(註10)しかしながら、源氏はもはや女房たちの手引きすらなく、藤壺のもとへ押し入ったものの、「宮いとこよなくもて離れきこえたまひて、はてはては御胸をいたうなやみたまへば」(一〇七、一〇八)というように、強く拒絶される。

男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明けはてにけれど出でたまはずなりぬ。

(二〇八)

もはや源氏は茫然自失の体であり、女房たちに塗籠に押し込められて、一日を過ごす羽目になる。このあたりの表現は、若紫巻の逢瀬の場面とよく似ているのであるが、それはむしろ、若紫巻の特別な逢瀬とはまったく対照的な事態であるためであろう。そして次の晩、源氏は再び藤壺に迫り、今度はその髪をつかまえるところまでいくが、

あらざりしことにはあらねど、あらためていと口惜しう思さるれば、なつかしきものからいとようのたまひのがれて、今宵も明けゆく。

(二一一)

とあつて、藤壺は拒絶しおおせた。

こうした光源氏の情熱は、単に桐壺院の死によつて引き起こされたものではなく、源氏自身にも抑制しがたい本源的なものだと考えざるをえない。また、この源氏の接近を回避するため、藤壺は出家を決断するが、そうした藤壺と比較して、まだまだ源氏が若く幼いからなどと捉えるのも、一面的であろう。源氏にとって藤壺への思いは、「癖」という語ではとりおさえることができないほど、より根源的な彼自身の存在と不可分のものなのであった。

藤壺は出家を遂げ、源氏は耐えがたい悲しみをおぼえながらも、次のように東宮の後見役を自覚する。

母宮をだにおほやけ方ざまにと思しおきてしを、世のうさにたへずかくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ、我さへ見たてまつり棄てては、など思し明かすこと限りなし。

(二三四)

このような自覚を抱きながらも、源氏は朧月夜との関わりをやめることがない。

後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて

度重なりゆけば、気色見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむとは啓せず。

(一四三～一四四)

「癖」と表現される源氏の好き心は、朱雀帝その人への反逆の気持ちではない。厄介な癖を抱え込むことで、その存在そのものが体制からはみ出さざるをえない、という意味で、光源氏の存在そのものが反逆的というほかはないのである。

朧月夜との密会は、やがて右大臣にその現場をおさえられ、源氏は須磨に下る。右大臣は、源氏が若いながらも当代の識者と評価されることから、こうした無分別な行動をとるとは思っていなかったが、源氏はそのような常識からはみ出す存在なのである。朱雀帝や右大臣方が敵対勢力だからというのではなく、自ら制御することのできない恋の情動によって、源氏はいかなる体制からも逸脱する存在にほかならない。

物語は、貴種流離譚の型に則り、源氏の須磨下りを実現するが、藤壺へのやむにやまれぬ思いと、「癖」と位置づけられる恋の情動が、源氏に都の中の居場所を失わせることになる。しかしそのことは、単に光源氏が無軌道な存在だということではなく、彼自身の中に出家への思いや東宮後見の自覚という側面もあれば、世間からの高い評価もあって、なおかつそれらを包み込むようにして恋の情動が彼を衝き動かしている、という性質のものであった。六条御息所の伊勢下向との間には、同じく恋の思いによって都から去るほかないという点でたしかなつながりを見出せるとともに、光源氏という主人公の複雑な内面がさまざまな振幅となって物語を動かしてゆく様相を見て取れることになるだろう。

注(1) 『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集本により、巻名、巻数、頁数を記し、巻名、巻数については適

宜省略する。

(2) 六条御息所と「憂し」との関係については、鈴木日出男「車争い前後―六条御息所と光源氏(一)」(『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年)

(3) 今井上「六条御息所 生霊化の理路―「うき」をめぐる―」(『源氏物語 表現の理路』笠間書院、二〇〇八年)

(4) 阿部秋生「光源氏の発心」(『光源氏論』東京大学出版会、一九八九年)

(5) 増田繁夫「葵巻の六条御息所」(『人物造型からみた『源氏物語』』(国文学解釈と鑑賞別冊) 至文堂、一九九八年) は、「この物語における女性の側からする男女関係は、いつもその男性と関わることで生ずる社会的意味を前提にして考えられているが、いまの御息所にとって源氏との関係を断つことは、自分に残された唯一の高貴の人々との関係をも失うことなのである」とする。

(6) 高田祐彦「光源氏の忍びの恋―『源氏物語』冒頭諸巻の仕組み」(『文学』二〇〇六年九・一〇月)

(7) 秋山虔「好色人と生活者―光源氏の「癖」」(『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年)

(8) (斎宮)「かうやうに、例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬることねたけれ」(九二)。(臙月夜)「例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり」(二〇二)。(臙月夜)についてもう一例は後掲。(朝顔の斎院)「あやしう、やうのものと、神恨めしう思さるる御癖の見苦しきぞかし」(二二〇)

(9) 高田祐彦「逆境の光源氏―賢木巻後半の方法」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年)

(10) ここは、「恋せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」(伊勢物語・六五段)をふまえた表現。『伊勢物語』では、帝の夫人に恋をした男が「わが心やめたまへ」と神仏に祈る。ここで藤壺が、「このこ

と思ひやませたてまつらむ」という思いで祈禱を行わせるのは、それだけ源氏の執心が尋常ではないからであらう。

(青山学院大学教授)